

福岡市長賞

「守られている僕らの暮らし」

福岡教育大学附属福岡中学校 3年

吉田 信貴

毎朝、新聞に目を通す。僕の一日は、ここから始まる。この夏、紙面を賑わせていたのは、豪雨・選挙・増税・原発。どれも僕らの暮らしに密接な情報でありながら、なかなか実感できない中学三年生の僕。どこかよその国のことのようにさえ感じる。自分の所じゃないから……。きっと誰かが……。僕は僕に出来ることを……。そう思い何一つ実行できてない自分に、何の疑問も感じていなかった。

八月一日、毎年恒例の花火大会に出かけた。翌朝の新聞一面は、「夜空を彩る六千発！四十五万人を魅了する」、との見出し。記事に目を落としながら、僕は思い出していた。美しい花火の下で、声を張り上げ誘導していた多数の警察官の姿。カラフルなビブスを着て、左側通行を呼びかけていた人々。人の波が引いた後、ゴミで埋めつくされた真っ暗な公園。美しかった花火よりも鮮明に、僕の目の奥に残っていた。新聞を閉じ、いつものようにランニングに出る準備をする。くつ下をはきながら、

「今日はコースを変えようかな。きっと昨日のゴミで走れんと思うし。」

つぶやいた僕に、母はすかさず反応した。

「えっ、なんで。今日こそ公園走りなさいよ。昨日のゴミがどうなっとうか、見といで。」母の声に押され、お決まりのコースを走って行く。公園が近づいてきてまず目に入ったのは、渋滞していた清掃車の列。公園の中では、作業服の人に混じって様々な服装のボランティアの人々が汗をたらしてゴミを片付けていた。僕が公園を走り始める七時過ぎには、ゴミの臭いや歩道のシミは残っていたが公園はいつもの姿に戻りつつあった。

朝食後、僕は気になってパソコンに向かった。インターネットで公園の清掃のことやボランティアのことを調べ始めたのである。いつも目を通すだけの新聞知識とは違って、知りたいと思う気持ちが強く動いているのが自分でも良く解った。その好奇心は、最終的に市の財政予算案にまでたどり着くこととなり、僕は目が覚める思いをした。市政の歳入のメインは、市民が納めている市税や国から配当される国庫支出金・地方交付税などの税金であり、歳出は保健福祉費・こども育成・教育費・環境・土木・消防、市民の現在や将来のためになされている。教科書で当然のように習ってきたことなのに、興味を持って覗いた身近な市政で目にした数字は、僕をドキドキさせた。

当たり前のように生活している僕らの暮らしの中には税金のおかげで成り立っているものがたくさんある。いや、きっと税金がなければ僕らの社会は存続できないであろう。これからの社会を担っていく僕ら自身が、税金によって守られている安全で平和な暮らしを実感することこそが、自ら進んで納める税制へと繋がっているのだと思う。今は、そんな思いで新聞を読んでいる。